

<実践発表> 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

パブリック・ディベート

「令和の新聞購読率低下を救え！～未成年の私たちからの提案～」

発表者 指導教諭 木幡 佳子

1 はじめに

(1) 学校の概要

本校は、宮崎県立宮崎西高等学校の理数科に接続する併設型の中高一貫校として、平成19年に開校し、今年度で16年目を迎えた。大塚地区の高台にあり、四季の自然に恵まれた、落ち着いた環境にある。「未知の我を求めて全力をつくそう」という創設の言葉のもと、新たな可能性を求めて、日々進化し続けている。中・高の6年間で三つの段階に分け、中学1年から2年を「基礎期」、中学3年から高校1年を「充実期」、高校2年から3年を「発展期」として、それぞれ、「立て」「飛べ」「行け」を合い言葉に、充実した学びができる学校である。中高合わせて、1200名を超える生徒が在籍しており、現在、中学生240名と附属中学校から理数科に進学した高校生とを合わせると、全校生徒の3分の1を占める。「確かな学力と基本的な生活態度を身に付けさせるとともに、真善美に胸ときめかす豊かな感性と創造力を備え、国際的視野で活躍する人材を育成する」を教育目標に、感性・探究・サイエンス・プレゼンテーション等特色ある教育課程が編成されている。

(2) 学校の目指す生徒の姿

- 誠実に学問に向き合い、自ら問いを立て主体的に探究し、全力で努力する生徒
- 豊かな感性を持ち、他者や様々な価値観を尊重し、自分や他者を全力で応援する生徒
- 世界を視野に、新しい価値の創造に挑戦し、力で試練を乗り越える逞しい心身を持つ生徒

また、令和2年度からスーパーサイエンスハイスクール研究指定校に選ばれ、未来イノベーションを牽引する人材を育成する中高一貫したSTEAMプログラムの推進も行われている。

(3) 学校におけるこれまでのNIE活動

各学年の廊下に新聞ラックが設置されており、中1：宮崎日日新聞(前日のもの)、中2：毎日新聞、中3：朝日新聞・読売新聞がそれぞれ置かれている。毎朝、各学年のNIE系の生徒が、事務室に新聞を取りに行き、掲示する。どの生徒も自由に新聞を閲覧することができ、気になる記事について意見を交わす光景が見られる。また、家庭で新聞を購入していない生徒は、自由に切り取って、新聞記事スクラップに活用している。身近に新聞があるので、朝の会や帰りの会で、その日の社会問題をすぐ取り上げて、紹介することもできる。



【廊下に置かれてある新聞ラック】

【国語科】

毎年「いっしょに読もう！新聞コンクール」に全校生徒で応募している。また、昨年度の第19回「新聞」感想文コンクールにおいて、本校生徒が最優秀賞に輝いた。

【社会科】

週末課題として、全校生徒で新聞記事スクラップに取り組んでいる。生徒がスクラップしてきた記事は、社会科通信『地道』で発信し、意見交換の場となっている。



【宮日新聞 2021.11.30】

2 実践の内容

(1) 「答えのない問い」を問う社会科授業の実践

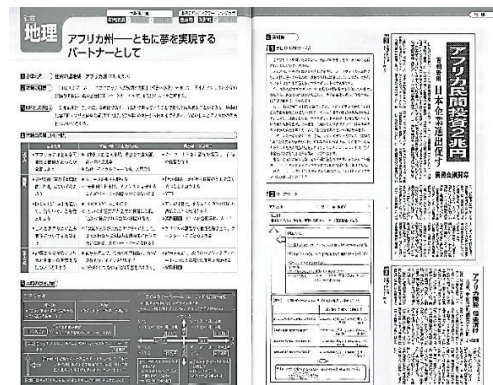
社会科は、現在起きている社会の問題を扱い、未来につなげていく教科である。新聞記事は、「今」を伝える媒体であり、時系列で追っていくことで変化を読み取ることができる。地理的分野と公民的分野において、新聞記事を活用した実践例を紹介する。

ア 地理的分野「アフリカ州～ともに夢を実現するパートナーとして～」

2019年第7回アフリカ開発会議(TICAD7)の開催から閉幕までを新聞記事で追い、今後の日本とアフリカの関係について考える授業実践を行った。

イ 公民的分野「平等権～医学部合格率 女性逆転!?!～」

2018年の東京医科大一般入試で女性の得点が一律に減点されていたことを伝える記事や3年後の医学部入試における女性の合格率が、男性を上回った記事を用いて、平等権について考えさせる授業実践を行った。



【『NIEガイドブック中学校編』掲載】

(2) 週末課題「新聞記事スクラップ」

社会科の週末課題として「新聞記事スクラップ」に全校生徒で取り組んでいる。約束事は、「新聞名を記入する。」「日付を付ける。」「オリジナルのタイトルを付ける。」の3点だけである。記事の選び方やまとめ方は、各自の自由である。一面記事に限らず、プロ野球の試合結果を随時記録したり、ふと目にとまった話題を取り上げたりしてオリジナルの一冊ができあがる。中1が中3の学習内容である「円安」についてスクラップし、学習内容の先取りを自ら行ったり、授業で学習した内容に関する記事が目にとまりやすくなったりする傾向があるので、授業内容を進化させる役目も担っている。



【新聞記事スクラップの例】

(3) 社会科通信「地道」

各自が提出した新聞記事スクラップは、「問い」の宝庫である。各自が新聞記事を読んでさらに調べたり、他の生徒に意見を求めたりすることもある。その際活用するのが、社会科通信『地道』である。この『地道』は、社会科の授業内容だけでなく、新聞記事スクラップに寄せられた生徒の意見や疑問から構成される。通信の最後に「つぶやき」欄が設けられており、記事や他の生徒の意見を読んだ感想をつぶやくことができる。自分では気にとめなかった記事を読む機会となり、他の生徒の考えに触れて、新たな見方や考え方を得る場となっている。



【社会科通信『地道』】

(4) パブリック・ディベートを用いた実践

本校では、日本パブリック・ディベート協会が制定したパブリック・ディベートを用いて、社会科授業や生徒総会を行っている。パブリック・ディベートとは、以下の目的のもと制定されたものである。

これまでのディベートは、論証を重視するため、根拠を専門的文献から引用し、スピーチの量が多くなりがちであった。結果として時間内にスピーチをおさめるために早口にならざるをえない面があった。こうしたディベートは、ディベートの知識や経験のない者にとっては、聴き取ることが難しいものであった。

そこで、一般市民にも聴き取りも、理解も容易なディベートに転換したい。専門家を真似るのではなく、市民として必要な議論を行うようにしたい。専門的文献からの引用ばかりでなく、具体的な根拠（先進事例や体験事例等）を重視する。そうすることで詳細に記録しなくても、記憶に残るスピーチになると考えられる。（「政策提案型パブリック・ディベート・ガイドライン」より引用）

また、パブリック・ディベートのフォーマットは右のような流れになっている。パブリック・ディベートのよさは、反駁する機会がなく、提案内容の

ステージ1	先行チームの政策提案	4分間
	後攻チーム準備時間	2分間
ステージ2	先攻チームの政策に対する質疑・意見交換	5分間
ステージ3	後攻チームの政策提案	4分間
	先攻チームの準備時間	2分間
ステージ4	後攻チームの政策に対する質疑・意見交換	5分間
	再提案の準備時間	5分間
ステージ5	後攻チーム再提案	4分間
ステージ6	先行チーム再提案	4分間

質を高めるための質疑と意見交換が設定されている点にある。また、提案型のパブリック・ディベートで議論される内容は、資源・エネルギー・環境問題等の社会的問題であり、是非論ではない。各チームは、求める問いに応じて、具体的な取り組みを提案し、互いにその活動の質を高め合うように議論することが求められる。つまり、反駁し合っ

りよい社会を築くための方策を練り上げていくのが、パブリック・ディベートの醍醐味である。このパブリック・ディベートを用いて、今回、「令和の新聞購読率低下を救え！～未成年の私たちからの提案～」を、中学3年生の社会科公民的分野「マスメディアと世論」と本校の特色ある授業である総合的な時間の「感性」の時間を使って、単元構成を行った。

3 成果と課題

(1) 成果

新聞記事スクラップに取り組んでいる在校生にアンケートを行ったところ、以下のよう
な回答が寄せられた。

- ・新聞を読むきっかけになった。
- ・新聞を読んで疑問に思ったことを、調べる習慣がついた。
- ・今の日本や世界の状況を知ることができる。
- ・新聞記事を通して、家族の会話が増えた。
- ・自分の考えを書くことで、記述力がついた。
- ・お目当ての記事を読んでいると、他の記事まで読むようになり、新聞の面白さに気づけた。

週末課題として毎週出されることによって、ほとんどの生徒に新聞を読む習慣をつける
ことができた。今回、新聞記事スクラップに取り組んでいるものの、「新聞」自体のよ
さや課題について議論をしたことがなかったので、パブリック・ディベートを通して、
「新聞」を見つめ直す機会となった。「新聞」の歴史や現状、購読率が低下している理由
などを調べることで、さらに新聞を身近に感じ、新聞スクラップに熱心に取り組む生徒
が増えた。また、下記は3年間、新聞記事スクラップに取り組んだ卒業生の最後の感想
である。

今回は最後のスクラップということで、気合い十分で臨んだ。やはり、高校進学に向けてとい
うことで、この2025年から大学入試共通テストに導入される「情報」についての記事が
一番よいと考えた。大学共通テストまであと三年、長いようで短いだろうと思っ
ている。夢を追いかけていながら、頑張っていきたい。そして、この「新聞記事
スクラップ」を三年間やってきて、知識が増え、それを言葉に表す記述能力も付
いた。これまでやってきて本当によかった「THE best of 課題」だ。とてもユニ
ークな課題をありがとうございました。

今を知り、未来につなげる知識の道具として、新聞記事スクラップは、確実に生徒の
財産となっていると考える。

(2) 課題

新聞記事スクラップが、定期テストや模試において、どのような効果を発揮している
のか、検証することはできていないのが正直なところである。また、「マナー化して
いる」、「役に立っているかが、今は正直まだわからない」とアンケートに回答した生徒
もいた。今後、中高一貫校として、大学入試などでどのような力が発揮できるのかを
検証していく必要がある。

<単元の流れ>

第1時：【社会科】

- ・新聞業界の問題点を知る

第2時：【感性】

- ・購読率を上げるための提案をグループで話し合う。

第3時：【感性】

- ・発表資料を作成する。

第4時：【感性】

- ・パブリック・ディベートを行う。

第5時：【感性】

- ・学級の代表チームを決定する。